

気象学・気候力学研究室（旧対流圏科学研究室）沿革（五十年史）

2015年10月1日

■創設から2012年3月まで（九州大学百年史より抜粋）

対流圏科学研究分野の歴史は、1965（昭和40）年に創設された物理学科大気物理学講座に遡る。その後、1992（平成4）年、地球惑星科学科への合流に伴い、地球惑星科学科地球惑星大気物理学講座へと編制替えされ、さらに1999年の大講座制発足に伴い、地球惑星大気物理学講座から流体圏科学講座の下の対流圏科学分野が誕生した。その後さらに講座編制の変更があり、現在は流体圏・宇宙圏科学講座の1分野となっている。

大気物理学講座の初代教授は澤田龍吉であり、助手には瓜生道也が就任した。1966（昭和41）年に松野太郎が助教授として東京大学より着任し、さらに宮原三郎が1972年に助手となった。松野は赤道域の大気運動の理論的研究により1970年度日本気象学会賞を受賞し、1971年に東京大学に転出した。1974年に瓜生が助教授に昇任、1976年には守田治が助手に採用された。瓜生は波と平均流の相互作用の理論的研究を行い、1978年度日本気象学会賞を受賞した。1980年に澤田が福岡教育大学学長として転出した後、1981年に瓜生が第2代教授に昇任し、1982年には宮原が助教授に昇任した。宮原は大気潮汐波による平均流生成の研究を行い、1985年度日本気象学会賞を受賞した。1982年4月、瓜生が新設の高層大気力学講座へ移動し、広野求和が地球物理学講座より第3代教授に着任、定年の1985年3月まで務めた。

地球惑星大気物理学講座の第4代教授は高橋 劭であり、1987年4月にハワイ大学より着任し、降雨・降雪と雷機構を中核とする対流圏の研究が中心になった。高橋の着任と宮原の高層大気力学講座教授昇任（1991年7月）に伴い、守田が1992（平成4）年4月助教授に昇任し、安井元昭が1989年6月に助手に就任した。守田は梅雨前線に伴う豪雨の機構の解明を中心とした中規模現象の研究を展開した。安井は降水過程の野外観測で優れた成果を上げ、1996年3月に郵政省通信総合研究所へ転出した。同年10月川野哲也が助手に着任し、竜巻を含む雲物理学やメソ対流系の研究で優れた成果を挙げた。

高橋は1997年3月に桜美林大学へ転出し、1998年4月に第5代教授として伊藤久徳が和歌山大学より着任した。伊藤は対流圏の研究のなかでも大規模スケールの力学を中心とした研究を行い、特に低周波変動を中心に成果を挙げ、2006年度日本気象学会賞を受賞した。守田は2010年3月で定年退職となり、福岡大学教授の職に就いた。

■2012年4月から現在まで

2012年4月に第6代教授として川村隆一が富山大学より着任した。伊藤は2013年3月で定年退職となった。2015年4月に研究室の名称が対流圏科学研究分野から気象学・気候力学分野に変更となった。引き続き、地球惑星科学部門流体圏・宇宙圏科学講座の1分野となっている。

補追：澤田龍吉（1976）：九州大学理学部における気象学の教育と研究。天気，23，94。

http://www.metsoc.jp/tenki/pdf/1976/1976_02_0094.pdf